

着衣する身体と 女性の周縁化

武田佐知子編



思文閣出版

まえがき

おおよそ人間は、人間として活動し始めた当初から、衣服をまもって生きてきた。着衣は人類共通の営為であり、人間存在の指標でもある。今なお、地球上のありとある民族は皆、衣服をまもって生活している。着衣は、寒暑を調節するなどの物理的機能のほかに、様々な機能を担っている。

着衣は、言葉によるコミュニケーション以前に、視覚によって意味を伝達する媒体である。人類社会において、着衣するという行為は、他者に見せ、自己を相対化させながら、特定の社会への帰属、あるいはジェンダー、宗教、職能といった社会内部における特定のアイデンティティを象徴する意味を担い、同時にその社会の構造をさえ、映し出してきた。

そして近代化の過程では、着衣は伝統社会における日常・非日常を区分する機能の上に、ある特定の意味を強く帯びるようになって来る。例えば国民国家やエスニシティにおける政治性であり、国民や民族を象徴する手段として、さまざまな運動の一体化に貢献してきた。「国民服」や「民族服」の創造がその例である。

あるいは、資本主義的欲望の対象となる差異の指標としての着衣であり、西洋的な規格の衣服に民族性を取り込んだ、ファッションとしての「民族衣装」がグローバル化する経済活動に組み込まれつつ、多文化的な状況をも生み出している。

本書は、このような着衣する身体が、政治的・社会的にいかにかに象徴化されてきたかを通時的に検証しながら、グローバル化という現代的な文脈の中で、着衣という行為がいかにかに再生産されてきたかを考え、これによって、着衣が人類

社会における新たな地平を拓く可能性を探ることを目的とする。

具体的には、着衣するという行為をジェンダーや人類学・民族学・政治学・歴史学など学際的な視点から読み解こうとするとともに、世界各地での着衣に関わる政治的・社会的な具体的事例を研究の対象とし、着衣という共通の素材を通して、個々の社会におけるジェンダーのあり方を研究し、さらに、地域間の比較を行うことによって、最終的に、グローバルな視点から、世界における女性の周縁化を理解しようとするものである。従来の研究は特定の地域や社会、あるいは時代を対象とする個別研究を中心としたものであり、世界各地の着衣に関する総合的かつ学際的な研究は、かつてなかったといえようし、人類社会全体における着衣の意味を複眼的に分析する点できわめて独自性があると思っ

ている。

本書は、旧大阪外国語大学のスタッフを母胎とし、総合科目「女性学」リレー講義を担当したメンバーを核にしている。そもそも「女性学」リレー講義は、世界各地の社会や文化や政治、そして言語学を専攻する教員が、その言語力を武器に、各々のフィールドで見聞きし、考えたことを、生の声で学生たちに伝えられたらと始めたリレー講義であった。いくつかの教科書や、研究書も刊行して来たが、大阪大学との統合を控えて、最後に大きな共同研究をと、2006年に科学研究費補助金の助成を得て、「着衣する身体と女性の周縁化」を立ち上げたものである。2007年度下半期からは、故若桑みどり先生が主宰し、ジェンダーと表象研究を一貫して進めてきたジェンダー研究所の有志の参加を得て、視覚表象における女性の身体と着衣表現の文化史的考察を行い、ジェンダー構造を問い直すことができた。

本書の成果の一つは、従来のカタログ的な着衣研究ではなく、個別地域の具体的な文脈から引き離さず、着衣・身体・女性の関係を読み解くための共通の枠組を構築し、ローカルな視点とグローバルな視点の接合によって、多様性の

なかの着衣研究の可能性を提示したことである。男性身体の周縁に位置づけられた女性身体の可変性、着衣による身体のアイコン化と増殖現象、共同体による着衣身体の共有と変換、ジェンダー秩序のなかで受容される女性身体の意味とその操作、そして既存の共同体の集会的に実践や意識／無意識が、視覚表象と深く関わり、相互交渉がなされていることを明らかにしえたと自負している。

2012年3月 武田佐知子